

新体制日本学術会議発足に当たり，各部部長及び副部長の先生方から御挨拶をいただきましたので，御紹介いたします。

広渡清吾第一部部長

ご挨拶

新体制の下で第一部(人文社会系)の部長の役目を務めさせていただくことになった。日本学術会議は、行政改革の枠のなかでその改革が提起されたが、第17期、第18期における会員の自己改革に向けての精力的な審議の成果が法改正に反映されて、新体制が発足することとなった。

前期19期では移行期についての暫定的準備が行われたが、改革の趣旨を実現するための本格的具体化はあげて第20期の新体制の活動にかかっている。連携会員の選考、学協会との新しい協働関係の確立、機能別、分野別、そして課題別などの各種委員会の活動の新たな展開など、まずは日本学術会議がそのもてる力を十分に発揮するための組織的体制の構築が重要であろう。

世界の平和と持続的発展に貢献する学術の役割をいかに追求するか、また人文社会系の学問がそのなかでどのような役割を果たすことができるのか。この課題を軸心にして、会員のみならずと協力して日本学術会議の活動を充実したものにするために精一杯努力したい。

広渡 清吾

-----

佐藤学第一部副部長

ご挨拶

第一部副部長に選ばれたことに驚き，責任の重さを痛感しています。第19期から継続して会員として選出されたこともあり，日本学術会議の新体制発足の意義を十二分に生かした活動を推進したいと思います。思い起こせば，第19期の最初の総会のときには，同じ第一部の江原由美子会員と私が「最年少の会員」ということで，会長選挙の立会人を指名されました。私は52歳でした。第19期と比べると，第20期の会員は4

0代の会員が数多く選出され、女性の会員は20%に達しました。この新しい風が、日本学術会議の新体制の新しい推進力になるよう尽力したいと思います。

日本学術会議が科学者コミュニティの中核として成長することが、日本の学術の発展の最大の推進力であると思います。また、日本学術会議が、科学者コミュニティの中核として叡智を結集することが、世界と日本の繁栄と平和と民主主義の実現のための最大の礎になると確信しています。第一部の会員の皆さんはもちろん、新体制の確立に向けて、忌憚のないご意見をお寄せいただき、これからの活動を支えていただければ幸いです。

佐藤 学

---

金澤一郎第二部部長

ご挨拶

2年前に初めて第19期日本学術会議の会員になってから、「俯瞰的」とか、「品格ある」とか、「ボランティア精神」などという学術会議にまつわるキーワードを知りました。これらの内容を、脳みそだけでなく、身体でもやっと少し理解したかな？と想着いたら、このたび第20期の新しい第二部（生命科学系）の部長にご推挙頂いてしまいました。正直なところ大いに戸惑っています。迷いながらも、日本の科学者コミュニティの中で、自分は何をやらなければならないのか？と自問しています。

生物学、農学、医歯薬学など、生き物に関係した科学者・研究者の集まりであります第二部としては、まずはこの領域の研究を（個別にではなく）総合的に大所高所から推進するのは無論ですが、それよりもむしろ、自分達の共通認識を国民一人一人に分かり易く説明する、という大切な任務を負っていると切実に感じています。そのようにして科学に対する基本的な理解が得られていれば、学術会議から政府や省庁への提言や勧告が、より効果的に生かされるのではないかと、とも思っています。言い換えれば、良い研究者が良い教育者（解説者）とは限らないという「神話」を打ち砕くよう努力したいということです。皆様のご協力とご支援を心からお願いいたします。

金澤 一郎

---

唐木英明第二部副部長

ご挨拶

「あり方懇談会」報告によれば、部の役割は、1) 部に関する学問領域の課題の審議、2) 委員会の設置の提案ならびに委員会に属する委員および連携会員の推薦、3) その他であり、前期までとそれほど変わってはいません。一方、部の構成は大きく変わり、生命科学部は旧六部、七部、四部の一部の会員が集まりました。「生命科学」という看板でくくるにはあまりに広い領域です。他の部も同様の状況にあります。3つの部は組織上の区分けであり、実質的な意味はあまりないとの黒川会長の説明でしたが、そうすると「部に関する学問領域の課題の審議」をどのように行うのかが心配になります。分野別委員会がその役割を担うものと期待されますが、そこにも問題があり、その分類や名称が適切なのかという意見もあります。連携会員の選出もまだ時間がかかりそうですし、関係学会との連携の具体的な方策も考えなくてはなりません。動き出したばかりの新たな組織に付きものの期待と不安が錯綜をしていますが、部長の指導の下に幹事と協力をして、なるべく早期に実質的な活動ができる生命科学部の構築に努力をしたいと考えています。

唐木 英明

---

海部宣男第三部部長

ご挨拶

思いがけなくも、今期の第三部（理学工学系）部長という重責を担うことになりました。

私は今期が初めての会員ですが、日本学術会議には研究連絡委員会等を通して、長い間お世話になっています。特に1970年の学術会議総会では、東京天文台（国立天文台の前身）の口径45メートル大型電波望遠鏡の建設推進の勧告を頂き、これを受けて1982年に野辺山の宇宙電波観測所が実現しました。日本の天文学の発展にとっても、また私の人生にとっても、決定的な出来事でした。

その後さまざまな要因で学術会議の社会的役割は後退していったとはいえ、天文学研究連絡委員会は、1985年に世界最大級の光学赤外線望遠鏡を海外最適地に建設するという画期的方針を大議論の末に打ち出すなど（これが現在ハワイで活躍中の口径8.2メートル「すばる望遠鏡」です）、天文学コミュニティの総意形成の場・国際的代表として、重要で実質的な役割を果たしてきました。

学術会議は、大きな改革を進めようとしています。分野の利害代表や名誉職ではなく、日本の学術の推進を図りつつ広く社会に貢献し、社会からの尊敬を得てその役割を果たしてゆく2千余名の優れた科学者のアカデミーを形成しようというこの改革の理念には、私も深く共鳴するところです。

一方、その立ち上げは容易ではありませんし、また科学者コミュニティとの広く深い連携の重要性も痛感しています。そしてそうであればこそ、日本学術会議の改革の成功と日本社会に根付いた学術・科学の発展のため、皆様と協力して微力を尽くしたいとの思いを強くしています。

どうぞよろしく願いいたします。

海部 宣男

---

土居範久第三部副部長

ご挨拶

海部第三部長の指名により第20期の第三部副部長に就任いたしました。16期、17期、18期と3期9年、日本学術会議会員を務め、16期は複数の部にまたがる学問領域に係る研究連絡委員会を取りまとめる複合領域研究連絡委員会運営協議会幹事、17期は第四部（理学）幹事、複合領域研究連絡委員会委員長、18期は第四部副部長、複合領域研究連絡委員会委員長ということで、17期から運営審議会に出ており、17期から始まった改革のお手伝いをしておりました関係で、19期には黒川会長諮問の「日本学術会議の新しい体制の在り方に関する懇談会」のメンバーとして新生日本学術会議の立ち上げに必要とする規則関連を作るお手伝いもさせていただきました。

今期の私の役割は、日本学術会議役員として17期、18期を通して築き上げられた改革の精神を生かした“真の”新生日本学術会議を立ち上げ、国の内外に存在感のある日本学術会議を作るお手伝いをする事と認識しております。何卒よろしく願い申し上げます。

土居 範久

---

次号（N0.4）では、幹事の先生方の御挨拶を掲載する予定です。

【問い合わせ先】日本学術会議事務局企画課広報担当

(Tel:03-3403-1906, p227@scj.go.jp)

=====

日本学術会議ニュース・メールは、転載自由です。貴団体の学術誌等への転載や貴団体の構成員への転送等をしていただき、より多くの方にお読みいただけるようにお取り計らいください。

なお、御意見等がありましたら、各問い合わせ先まで、お寄せください。

また、メールアドレスの変更等がありましたら、[p227@scj.go.jp](mailto:p227@scj.go.jp)まで御一報いただければ幸いです。

=====

発行：日本学術会議事務局 <http://www.scj.go.jp/>

〒106-8555 東京都港区六本木 7-22-34